

# マイナー・サブシステムの特性と社会的意味

沖縄県国頭郡今帰仁村古宇利地区を事例として

川 田 美 紀<sup>†</sup>

## Characteristics and Social Significance of Minor Subsistence

A Discussion Focusing on a Case Study of Kouri Island, Okinawa Prefecture

KAWATA Miki

### 要 旨

沖縄県国頭郡今帰仁村古宇利地区におけるマイナー・サブシステムを活動の場の生活空間からの距離と資源採取の不確実性という2つの観点から類型化し、その特性と社会的意味について論じる。

事例地におけるマイナー・サブシステムは、外部条件によって活動の意味や活動そのもののあり方が大きく左右されるケースがあった。日常の生活空間に近い場所でおこなわれるマイナー・サブシステムは、確実に採取できる資源が多く、採取は比較的容易で、主要な生業の合間におこなわれる傾向があった。日常の生活空間からやや遠い場所でおこなわれるマイナー・サブシステムは、熟練した技法が必要とされ、比較的年配の人たちが熱心におこなう傾向がみられた。また「ユイムン（寄り物）」と認識されている資源があり、その恵みは個人や一部の人たちで独占するのではなく、島の人びとに積極的に共有されるべきものと考えられていた。

### Abstract

This paper argues the characteristics and social significance of minor subsistence through typifying it from two points of view; one is the consideration of the distance between people's "lived space," or place of residence, and the place where minor subsistence is practiced, and the other is the uncertainty of resource acquisition.

In Kouri island in Okinawa prefecture, some activities that can be understood as minor subsistence change their meanings with the social condition outside of the local

---

<sup>†</sup> 大阪産業大学 デザイン工学部環境理工学科准教授

草 稿 提 出 日 11月11日

最 終 原 稿 提 出 日 2月23日

community. The minor subsistence that takes place near the usual living space tends to be easier for successful practices to result and is carried out during the intervals of major subsistence. On the other hand, minor subsistence practices taking place farther from residential locations tend to require higher skill and are thus performed by elderly people.

キーワード：マイナー・サブシステンス、空間、不確実性、社会的意味

Keywords : Minor Subsistence, Space, Uncertainty, Social Significance

## 1. マイナー・サブシステンスの類型

松井健によると、マイナー・サブシステンスとは、生計を維持するための主要な生業にはなりえない、つまり経済的意味はさほど大きくない生業のことであり、しばしば伝統的な活動で、採取から消費までの過程が短く、自然との密接なかかわりのなかでおこなわれ、高度な技術を用いず（ゆえに人びとが保有する技法によって成果が左右される）、楽しみや喜びといった情緒的価値をもたらすものである。また、活動の場は、空間的あるいは時間的に限定されており、人びとの努力によって成果が大きく変化するような性質のものではない（松井、1998）。

それまでの生業研究では生業は、主要な生業、副次的な生業というような捉え方はされていたが、副次的あるいは副次的とも言い難いような経済的意味の小さな活動は、あまり注目されてこなかった。マイナー・サブシステンスという概念を導入したことによって、生業を経済的意味の大きさによって序列化するのではなく、人びとがそのような活動をおこなうことの経済的意味以外の意味を検討することが可能となり、これまで、さまざまなマイナー・サブシステンスの事例、さらには人びとにとってマイナー・サブシステンスがどのような意味を持つ活動であるのかが論じられてきた（熊倉、1998；松井、1998；菅1998）。

たとえば、マイナー・サブシステンスを定義した松井は、沖縄でおこなわれていたマイナー・サブシステンスとして、ジュゴン漁、イルカ漁、タカ獲り、海ガメ漁、シイラ漁、旧暦三月三日におこなわれる浜下りの儀礼、スク（アイゴの稚魚）漁などを挙げている。また、イルカやタカに言及し、それらは毎年同じ時期に集落の外の世界からやってくる「ユリムヌ（寄り物）」であり、人びとはそれらに対して感謝と神秘的な気持ちを持っていると述べている（松井、1998）。

同じく沖縄県の事例ではあるが、熊倉文子は、おもに女性たちが仕事の合間におこなっ

ているおかずとりとしての海浜採集活動を取り上げ、採集活動をおこなう人びとの年齢層や生業、活動をおこなう季節や時間帯、採集物などを詳細に調査し、活動が人びとに楽しみや喜びをもたらしている点は共通しているものの、人びとによって採集活動のあり方が多様であることを指摘している(熊倉, 1998)。

これらの事例をみてみると、マイナー・サブシステムとして捉えられる活動のなかにも、異なる性質を持ったものが混在しているように思われる。

まず、マイナー・サブシステムがおこなわれる場に注目してみると、主要な生業がおこなわれる空間に近接したところでおこなわれる、先述した熊倉が目にした「おかずとり」のようなものと、日常的には人びとが足を踏み入れることが滅多にないような、人間が自然の脅威の影響を受けやすい空間、たとえば、松井が紹介しているヤマブドウの木の皮を採取するために熊と遭遇する危険のある空間に出かける事例(松井, 2004)などがあることがわかる。

また、マイナー・サブシステムによって獲得する資源<sup>1)</sup>の性質という観点からみると、確実に、あるいは容易に獲得できる資源と、獲得にはかなりの不確実性が伴う資源が存在する。確実に、あるいは容易に獲得できる資源の場合は、一度に大量に獲得することが困難であったり、資源の経済的価値が小さかったりするために、主要な生業にはなりえないことが多い。一方で、活動をして、確実に獲得できるかどうかはわからない、偶然性の高い資源の場合は、資源の経済的価値は大きいことがしばしばではあるが、獲得できるかどうかは不確実な資源に依存して生計を維持しようとすることは生活するうえでのリスクが高すぎるために、主要な生業にはなりえない。

これらをふまえて、マイナー・サブシステムがおこなわれる場の「生活空間からの距離」、 「資源採取の不確実性」という2つの軸を使って、マイナー・サブシステムを整理したのが図1である。

- ①マイナー・サブシステムがおこなわれる場は生活空間から近接しており、活動することによって確実に資源採取ができる
- ②マイナー・サブシステムがおこなわれる場は生活空間から近接しており、活動することによって資源採取ができるかどうかは不確実である
- ③マイナー・サブシステムがおこなわれる場は生活空間から離れており、活動することによって資源採取ができるかどうかは不確実である
- ④マイナー・サブシステムがおこなわれる場は生活空間から離れており、活動することによって確実に資源採取ができる

本稿では、沖縄県国頭郡今帰仁村古宇利地区におけるマイナー・サブシステムを活動

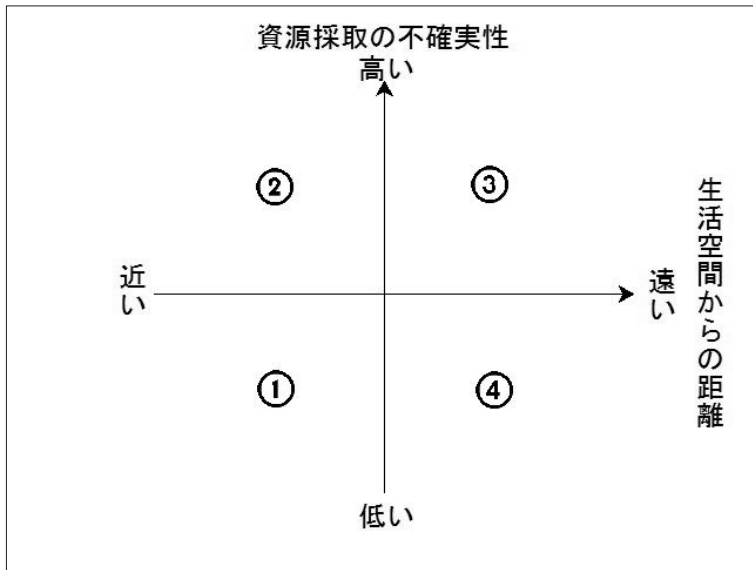


図1 マイナー・サブシステムの4類型

の場の生活空間からの距離と資源採取の不確実性という2つの軸を使って位置づけ、それに沿って、マイナー・サブシステムの特性と社会的意味について論じたい。

## 2. 事例地の概要

沖縄県国頭郡今帰仁村古宇利地区は、2017年10月末現在人口368人、男性214人、女性154人、世帯数224世帯の架橋離島である。島に橋が架かったのは2005年で、橋が開通して以降、島の人びとの生業形態や生活スタイルは大きく変化している。

それまで半農半漁で生計を立てていた人びとが大半で、サービス業に従事しようとする人びとは島を出て、今帰仁村の中心部や名護市に居住するのが一般的であったのが、島から通勤が可能になったり、逆に、名護市に居住して島で漁業を営んだりすることも可能になった。このようなことから、島に住んでいる子どもの数は、橋が架かる前から減少していたが、橋が架かったことにより、子どもを持つ親は友達がたくさんいる環境のほうがよいと考えて、島外に住むことを選択するケースが多くなったように思われる。2013年には島にあった小学校（古宇利小学校）が閉校になっている。

さらに大きな変化は、観光業が盛んになったことである。島内には、観光客を対象にした飲食店や宿泊施設が多数立地し、それらのなかには島外から移住してきた人びとによって営まれているところも少なくない。民泊も盛んにおこなわれるようになり、民泊だけで

かなりの収入を得るようになった家もある。

古宇利島は「神の島」と言われており、毎月のように神事がある。それらの神事を担っているのは、神人と呼ばれる人たちである。ここ10年ほどの間に、長年神人をしてきた人たちが立て続けに亡くなり、もともと人数も減っていたことから、出ている神人の負担が大きくなっており、継承が困難になりつつある。

このように古宇利島は橋が架かったことによって、地域の産業構造や社会構造が大きく変化している地域である。マイナー・サブシステムは主要な生業の変化の影響を受けやすいと考えられるため、主要な生業や地域の産業構造が変化している地域では、マイナー・サブシステムの特性がより捉えやすいと考えられる。また、古宇利島にはマイナー・サブシステムと位置づけられるような活動の種類が比較的多く残っているため、複数のマイナー・サブシステムの比較が可能である。

### 3. 古宇利島におけるマイナー・サブシステム

古宇利島の人びとへの聞き取り調査によれば、島にはさまざまなマイナー・サブシステムがあるが、その種類は昔に比べると減っている。図2は、聞き取り調査および文献調査により把握できている古宇利島の海および海浜におけるマイナー・サブシステムとして捉えることができる活動を活動の場の生活空間からの距離と資源採取の不確実性の2つ

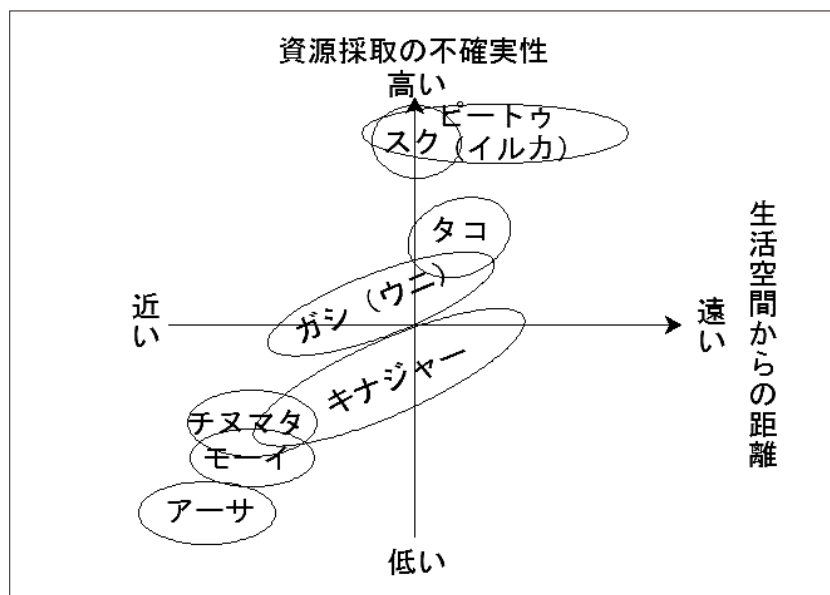


図2 古宇利島におけるマイナー・サブシステム

の軸の上に位置づけたものである。それぞれの度合いは、事例地で活動をおこなう人びとの感覚を、聞き取り調査や参与観察の結果にもとづいて筆者が推定したものである。したがって、生活空間からの距離は、単なる物理的な距離ではなく、活動をおこなう人びとが居住地からその場所にたどり着くために要する移動時間と移動手段（潜るなどの身体能力や船などの設備を必要とするかどうか）を考慮している。なかには、イルカ漁やウニ漁など、現在はおこなわれていないものもある。

### 3-1. 生活空間から近接しており、資源採取が確実なマイナー・サブシステム

アーサは、春先に海浜に生える海藻の1種である。味噌汁に入れるなどして食べる。採取に出かける際は、滑りづらい靴を履いて行くくらいで、それ以上の特別な装備をする必要はなく、遠くに出かける必要もなく、海岸沿いを歩いていれば目視で確認ができ、その場に生えていて逃げることもないので、潮が引いている時期に行けば、女性や子ども、高齢者など体力に自信がない人びとでも容易に採取することが可能である。ただ、採取した後、消費するまでの手間は少しかかる。アーサに付着している砂などを洗って落とす必要があるからである。

他にもモーイ、チヌマタなどの海藻の採取も、採取できる場所がアーサよりやや生活空間から離れるが、同様である。

キナジャーは、巻貝の1種である。茹でたものをそのまま食べることが多い。海藻と異なり動くため、海藻よりは採取の難易度が少し高くなる。海浜を歩きながら採取する人びともいるが、海に潜って採取することが多い。その場合は、最初からキナジャーの採取が目的で出かけることもあるが、タコ獲りに出かけて、タコを探しながら、キナジャーを見つけたらついでに採取するというようなパターンもある。採取したキナジャーは、鍋（一般に、シンメー鍋と呼ばれる大鍋）で茹でて、貝殻から貝を取り出す。

さらに、資源の種類の設定はないが、旧暦三月三日に海浜で資源採取をおこなう、「浜下り」という行事もある。女子は、旧暦三月三日には海浜を歩き、身を清め、厄災を免れることができると言い伝えられている。

これらの資源採取、とくに海浜を歩きながら資源を採取する活動は、古宇利島ではしばしば知人と誘い合っておこなわれている。

### 3-2. 生活空間から近接しており、資源採取が不確実なマイナー・サブシステム

シラヒゲウニ（現地ではガシ）は、現在は採取されていない資源である。島の周辺はリーフが形成されていて、潮が引いているときであれば、少し潜れば簡単にウニを採取するこ

とができた。筆者が古宇利島での調査を開始した2008年、そしてそれ以降しばらくの間は採取がおこなわれていたが、マイナー・サブシステムではなく、主要な生業あるいは副次的な生業として成り立っていた資源採取であった。したがって、放流や移植、採取できる時期や漁の制限といった資源を維持するための取り組みもおこなってはいたが十分な成果が上がらず、個体数が減ってしまい採取できない状況が5年ほど続いている。

安陪麻子によると、かつては自家消費や畑の肥料としての採取がおこなわれていて、取引業者が現れたことによって主要な生業あるいは副次的な生業として成り立つようになったとのことである。さらに、主要な生業あるいは副次的な生業として資源採取がおこなわれるようになってからは、漁業組合の組合員になることで採取が可能になる形に変化し、それまでの、誰もがこなえる自家消費あるいは肥料用としての採取活動も締め出すことになった(安陪, 1992)。

### 3-3. 生活空間から離れており、資源採取が不確実なマイナー・サブシステム

タコ獲りは、古宇利島周辺で捕獲できる他の魚類と比較すると、捕獲するための設備・道具への投資がほとんど必要ない。タコを突くためのモリさえあれば、はじめることができる。ただし、泳ぎが上手で、タコヌヤー(タコの棲家)やタコの特性を知らないければ、捕獲することが困難である。なので、島ではタコ獲りが上手な人のことを、タコ獲り名人と呼ぶ。高度な技術を用いず、個人の技法の熟練が成果を大きく左右するという点では、マイナー・サブシステムの要素を備えているが、複数の漁を組み合わせることで生計維持の一端を担うこともある。「あの人はタコ獲りをして稼ぎ、家を建てたから、あの家は“タコ御殿”だ」というような説明を島の人から聞いたことがある。しかし、現在の島の漁業をみると、漁業で稼ごうという人は、刺し網やナマコ、シャコガイの採取、モズクの養殖など、タコ獲り以外の漁をしていて、タコ獲りをするのは、比較的年配の人、あるいは半農半漁の生業形態で生計を維持している人が多いようである。

古宇利島では、旧暦6月1日にスク(アイゴの稚魚)がやってくると言われている。スクは、群れで回遊する習性があり、4~6人程度で出漁し、巻き網で捕獲する。群れがやってきたのを見つけた島の方は、他の島の人びとに「スクが来たぞ」と連絡をする。一緒に出漁しようとする仲間にはもちろん連絡をするが、それ以外の人にも知らせるそうである。島の方の話によると、スクはユイムン(寄り物)なので、その恵みは皆で共有するのだという。このような規範は、漁に関してもそうであるが、捕獲した後にも働いていて、出漁する現場に偶然遭遇した私のような傍観者にもお裾分けをするべきだという人もいた。

橋が架かる前までは、スクの群れは毎年やってきたそうだが、橋が架かってからしばらく

くの間、来ない時期があった。最近はほぼ毎年来ているが、あまり多くはないようである。毎年必ず群れが来るわけでもなく、漁ができる期間も極めて限定的であるため、安定した収入源にはなりえないとのことである。島の人に言わせると「スクは海人（漁業者）にとって、ボーナスみたいなもの」なのだそうだ。

事例地概要で触れたように、古宇利島にはたくさんの神事がある。そのなかに、ピートゥ（イルカ）を捕まえる所作をおこなう神事がある。ピートゥ役を担当する人は、神人以外の島の人で、ピートゥが海のなかを回遊している様子を表現するために、ごごをかぶり、両手を羽ばたかせて歩く。それを、複数の神人が追いかけて捕獲するというものである。スクと同様、ユイムン（寄り物）であり、漁をしている最中に遭遇した場合は、捕獲するのが“礼儀”とされていたそうである（現在は、捕獲が禁止されている）。また、捕獲したピートゥは、漁港で調理され、島に住んでいる人びと皆に分配されたそうである。神人たちは、感謝の御願（祈り）をしたそうである。

#### 4. マイナー・サブシステムの特性と社会的意味

本稿では、沖縄県国頭郡今帰仁村古宇利地区におけるマイナー・サブシステムを活動の場の生活空間からの距離と資源採取の不確実性という2つの観点から類型化し、限られた事例ではあるがそれらの特性を記述してきた。

事例地におけるマイナー・サブシステムは、必ずしも一貫してマイナー・サブシステムとしておこなわれてきたものばかりではなく、取引業者が現れることで経済的意味が大きくなって主要な生業あるいは副次的生業として成立したり、規制によって捕獲ができなくなるといった、外部条件によって活動の意味や活動そのもののあり方が大きく左右されるケースがあった。

日常の生活空間に近い場所でおこなわれるマイナー・サブシステムは、確実に採取できる資源が多く、採取は比較的容易にでき、主要な生業の合間におこなわれる傾向があった。日常の生活空間からやや遠い場所でおこなわれるマイナー・サブシステムは、さらに大きく2つに分けることができ、1つは、タコ獲りのように、熟練した技法が必要とされ、比較的年配の人たちが熱心におこなっているものである。もう1つは、「ユイムン（寄り物）」と認識されている資源である。「ユイムン」は、その資源に遭遇した人の意思（捕獲したいかどうか）にかかわらず、享受するのが礼儀と考えられてきた。また、その恵みは個人や一部の人たちで独占するのではなく、島の人びとに積極的に共有されるべきだと考えられていた。



最後に、マイナー・サブシステムの社会的意味を検討しよう。本稿でみてきたマイナー・サブシステムには、活動そのもの、あるいは活動によって採取した資源を、地域の人びととの間で共有しようとする規範が働いていたものが少なくなかった。そのような規範が働く根拠としては、人びとはそれらの資源を自然からの恵みと理解しているということが考えられた。活動や資源を共有することで、地域の人びとは自然が地域のみんなのものであるという意識を抱きやすくなると考えられる。また、活動や資源を共有することは、自然とかかわる経験を共有することでもあり、自然とかかわる経験は、人びとが自然を身近に感じ、自然環境に対する関心を維持することに寄与すると考えられる。

## 参考文献

- 安陪麻子, 1992, 「沖縄のサンゴ礁とウニ漁—古宇利島を中心に」サンゴ礁地域研究グループ『日本のサンゴ礁地域 2 熱い心の島—サンゴ礁の風土誌』古今書院78-91
- 熊倉文子, 1998, 「海を歩く女たち—沖縄県久高島における海浜採集活動」篠原徹編『現代民俗学の視点1 民族の技術』朝倉書店192-216
- 松井健, 1998, 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『現代民俗学の視点1 民族の技術』朝倉書店247-268
- , 2004, 「マイナー・サブシステムと日常生活—あるいは、方法としてのマイナー・サブシステム論」大塚柳太郎・篠原徹・松井健編『生活世界からみる新たな人間—環境系』東京大学出版会61-84
- 菅豊, 1998, 「深い遊び—マイナー・サブシステムの伝承論」篠原徹編『現代民俗学の視点1 民族の技術』朝倉書店217-246
- 高崎優子, 2013, 「自然を楽しむ作法：沖縄県における寄り物漁を事例として」『研究論集』北海道大学大学院文学研究科 (13) 584-603

## 注

- 1) 本稿で論じる資源は自然資源であり、基本的には人間の手が加わっていないものであるが、なかには生育環境を整えたり、数を増やすために放流をおこなう資源も含まれている。